様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００１４８

研究課題名（和文）新ドイツ派の「室内楽」概念：19世紀音楽史の空白を再検討する試み

研究課題名（英文）Rethinking of an idea of "Chamber music" in 19th century: Focusing on the practice and discourse of the New German School

研究代表者
朝山　奈津子（ASAYAMA, Natsuko）

弘前大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０５３５５０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ADMVのTV第1回（1859）から第38回（1902）までの室内楽コンサートの全曲目をデータベース化し、傾向として、声楽、特に独唱歌曲が過半数を占めること、器楽作品の作曲家としては、ブラームスに次いでドレーゼケ、ベートーヴェン、ラッセンが多いが、多くの作品が時代を超えるレパートリーとして残っていないことが分かった。また、本研究を通じてはさらに、「新ドイツ派 Neudeutsche Schule」の命名の背景、とりわけ「派 Schule」のコンテクストと、「派」（日本語ではしばしば「楽派」）の語が音楽史記述に導入された経緯、およびその意味の変遷について明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の意義は、従来の音楽史記述の見直しに関わり、以下の通り大きく2点ある。
第一に、従来の音楽史において、ブラームスと「新ドイツ派」の関係は良好でなかったとされ、盛期ロマン主義の音楽美学が党派論争として語られる傾向があった。しかし、TVにおいてブラームスの作品が繰り返し取り上げられたことは、当時の音楽創作が実際には党派論争に収まりきらないものであることを示唆している。
第二に、「楽派」という語の意味の歴史的変遷を通じて、これまで曖昧に、あるいは恣意的に用いられてきたこの語が、音楽史記述のための概念であることが明確になった。

研究成果の概要（英文）：In this research a comprehensive database encompassing the entire repertoire of chamber music concerts from the first (1859) to the 38th (1902) Tonkuenstlerversammlung (musicians assembly) of the Allgemeiner deutscher Musikverein (General German Music Association) has been compiled. It has been ascertained that vocal music, vocal compositions, particularly solo songs, constituted a predominant portion of these concerts.Although F. Draeseke (1835-1913), L. v. Beethoven (1770-1827) and E. Lassen (1830-1904) were the significant composers for the instrumental literature besides J. Brahms (1833-1897), the majority of works by other composers did not endure in the repertoire over time. Additionally, this research has contributed to a more profound comprehension of the origins of the term "New German School", and the evolution of the concept " school" within the realm of music historiography.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽史記述　楽派概念　新ドイツ派　チャールズ・バーニー　フランツ・ブレンデル　グイド・アドラー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

20 世紀最後の 20 年ころより、西洋音楽史におけるドイツ中心主義が批判され、音楽史観や価値基準の変更と、あらたな研究手法による音楽史記述の更新が進められてきた。しかし、19 世紀の「室内楽」を巡ってはまだ研究の余地が大いに残されている。

一例を挙げるなら、音楽通史として広く読まれているグラウト=パリスカ『西洋音楽史 *A western history of music.*』第 5 版（1996; 邦訳 2001）の中で「19 世紀の室内楽」の項は、次のように始まる。「室内楽という形態はロマン時代の作曲家の多くの気質に合わなかった。それは、ピアノ独奏曲やリートのような親密な個人的伝達に欠けていたし、管弦楽作品の鮮やかな色彩や力強い響きも持っていなかった。だから、もっとも代表的なロマン主義者であるベルリオーズ、リスト、ヴァーグナーが室内楽にまったく貢献していないこと、そして、19 世紀の最もすぐれた室内楽作品が古典的伝統をきわめて身近に感じていた作曲家たち―シューベルト、ブラームス、それについてメンデルスゾーンとシューマン―によって生み出されたことは驚くに当たらない。」[グラウト、パリスカ 2001: 70 (842)] こうした見方が大作曲家やいわゆる傑作のみに焦点を当てる古いタイプの歴史記述であることは明らかだ。

20 世紀末に新訂された 2 つの音楽事典、MGG 第 2 版（1996）と New Grove 第 2 版（2000）の「室内楽」の項をひもといてみると、作曲家の活動よりもむしろ、プロフェッショナルな演奏団体のコンサート・レパートリーを記述の中心として、19 世紀の音楽生活全体の中で「室内楽」を描き出そうと試みている。しかし、記述の流れは結局のところ、古典派の傑作が 19 世紀を通じてレパートリーとして定着し、作曲上の規範となった過程を述べるに留まっている。

２．研究の目的

本研究では、「室内楽という形態はロマン時代の作曲家の多くの気質に合わなかった」という従来の史観に批判的な目を向け、最終的な目標として、「室内楽」に代わる新たな、あるいはより詳細な枠組を見出し、19 世紀の音楽史の再構築の手がかりを得ることを目標とする。その最初の段階として、19 世紀後半に「前衛」を名乗った「新ドイツ派」の活動の調査と、具体的な作品名や音楽家、音楽団体、出版者などの情報の整理を目的に研究を開始した。また、「新ドイツ派」の支持者を中心に行われた全独音楽協会 Allgemeine Deutsche Musikverein（ADMV）の音楽家集会 Tonkünstler Versammlung（TV）の全曲目をデータベース化し、自他の今後の研究に資するよう提供することも、本研究の主要な目的の一つであった。

３．研究の方法

手法は言説研究を基本とする。

「新ドイツ派」の活動に関する調査対象は、前述の通り ADMV の TV の曲目、『音楽新報 *Neue Zeitschrift für Musik*（*NZfM*）』上の作品批評や音楽評論である。また当初は、ほとんど出版に供されなかった TV の「室内楽コンサート」の各作品について、ドイツ各図書館で手稿資料を参照し、音楽的特徴を分析する計画でもあった。

しかし、研究初年度がいわゆるコロナ・パンデミックの開始と重なり、研究代表者の多忙と国内外の移動の制限のため、研究方法の変更を余儀なくされた。そのため、研究目的にも若干の変更が生じ、「新ドイツ派」の活動実態や理念の調査、そこから派生した音楽史上の「派」概念の検討により多くの労力を割くこととなった。また、ADMV の年次集会に関しては、包括的な資料集成が 2021 年に発表されたため（Neubauer and Radechke 2021）、本研究が目的の一つとしていた全曲目のデータベースの意義は薄れたが、「室内楽コンサート」に限定し、本研究のための情報収集として、曲目のリストアップを行った。

４．研究成果

本研究を通じて、大きく 3 つの成果が得られた。

（1）「新ドイツ派 Neudeutsche Schule」の命名の背景、とりわけ「派 Schule」のコンテクスト
（2）「派」（日本語ではしばしば「楽派」）の音楽史記述における意味の変遷
（3）ADMV の TV における室内楽レパートリーの傾向

（1）ブレンデル Franz Brendel（1811–1868）が 1859 年に提唱した「新ドイツ派」を巡っては、とりわけ「新」「ドイツ」の意味合いや、この「派」に属する音楽家について活発な議論がある（Determann 1989, Kleinertz 2006, Dömling 2008, 上山 2008, 上山 2011, Roth & Roesler 2020 など）。ブレンデルは「新ドイツ派」を「古ドイツ派」に対置し、音楽史上の重要性を強調した。リストが創設した「新ヴァイマル協会」から着想を得た可能性もあり、ブレンデルは協会に代えて「派」を用いたとも考えられる。しかし、そこで「派 Schule」の語が選択されたのか、詳しい考察はこれまでまだなかった。

本研究では、その背景に音楽史記述のコンテクスト、すなわち、地名と結びついた楽派概念があったと仮定し、19 世紀前半の音楽史書や事典、また雑誌記事などを参照しつつ、ブレンデルの執筆した『イタリア、ドイツ、フランスの音楽史 *Geschichte der Musik in Italien, Deutschland*

und Frankreich』（1852; [4]1867）を読み解いた。その結果、この語が国民様式の議論を汲んで地名との結びつきを強め、音楽史を体系づける概念へと変容する過程が明らかになった。

ブレンデルは『音楽史』の 17 世紀までの記述に際し、先行研究として Burney 1776–1789, Forkel 1788–1801, Baini 1828, Winterfeld 1832, Kiesewetter 1834; [2]1846 を踏まえ、ネーデルラント、ローマ、ナポリ、ヴェネツィア、ボローニャの各「楽派」に紙面を割く。ただし、地域ごとの様式の対比以上に、各作曲家の師弟関係を叙述する点に特徴がある。これに対し、18 世紀以降に関わる章には、都市名ではなく作曲家名を冠した「楽派」が設定される。これらの「楽派」を構成するのは、実際の師弟関係よりも、共通する音楽様式を選択した作曲家である。チェルニー Carl Czerny（1791–1857） はベートーヴェン Ludwig van Beethoven（1770–1827）に師事したが、ブレンデルによれば「モーツァルト楽派」と呼ばれる[Brendel [4]1867: 492]。すなわち、近代的な「楽派」は作曲家自身の創作上の選択によって形成ないし結成される。そして「新ドイツ派」は、音楽史上の「古ドイツ派」の伝統を踏まえつつ、ヴァーグナーRichard Wagner（1813–1883）やリスト Franz Liszt（1811–1886）の掲げる新しい音楽の理念に賛同する音楽家の集団なのである。[Brendel [4]1867: 647]

以上のような経緯から、ブレンデルはみずからが支持する新しい音楽運動に「派」の語をもちいることで、音楽史と音楽批評を結びつけたということができる。

（2）ブレンデルが利用した「楽派」なる語は、どのような経緯で音楽史記述に登場したのか。また、当初はどのような意味合いを持ち、どのような変遷をたどったのか。結論から言えば、当初は音楽通史の中で特定の時代を叙述するための枠組であったものが、20 世紀には大作曲家の業績や歴史的な傑作を国や地域と結びつけるためのナショナリスティックな含意をもつ概念へと変化した。

本研究では「楽派」概念の始まりを美術史と仮定し、ヴァザーリ『画家・彫刻家・建築家の生涯』（1550）以降の史書の概要を踏まえつつ、17 世紀以降の音楽史書における「派」の用法を分析した。その結果、美術史では地域ごとに様式を対比する慣習が 17 世紀までに定着し、とりわけ各地域の様式（マニエラ）を「派 scuola」と呼んだボローニャの美術家アグッキ Giovannni Battista Agucchi（1570–1632）の分類[Pastres 2018: 537]が、同じボローニャの音楽理論家マルティーニ神父 Giambattista Martini（1706–1784）を通じてバーニーCharles Burney（1726–1814）の『総合音楽史』（1776–1789）に援用されたことが明らかになった。

もっとも英国人バーニーは、イタリアの 15–16 世紀の音楽についてのみこの語を当てはめるにとどめ、音楽史における「派」の定義や成立要件を詳しく述べなかった。同時期に起草されたシューバルト Christian Daniel Schubart（1739–1791）「音楽美学の構想 *Ideen zu einer Ästhetik der Tonkunst*」（1784/85; 1806 出版）でも、美術史の「派」の語を借りたことが述べられている[Schubart 1806: IV]。（なお、ホーキンズ John Hawkins（1719–1789）は美術の用語である「派」を音楽史に適用することには批判的で、この語をほとんど用いていない。[Hawkins 1776, V: 294–295]）このように、18 世紀の内には章立てのための装置だった「楽派」は、18 世紀末から 19 世紀前半の音楽史書や事典項目、とりわけキーゼヴェッターRaphael Georg Kiesewetter（1773–1850）の「論考 Verhandelingen over de Vraag」（1829）を通じてナショナリズムを帯びる概念となる。彼は、オランダ連合王国主催の音楽史論文の公募に応じ、15 世紀にイタリアの諸「楽派」に先駆けて多声音楽の基礎を築いた「ネーデルラント楽派」の功績を論じて首席に選ばれた。しかし、その後の自著『西洋ないし現代音楽史 *Geschichte der europäisch-abendländischen oder unsrer heutigen Musik*』（1834）では、「楽派」概念の曖昧さを訴えてこの語を放棄しようとした [Kiesewetter 1834; [2]1846: 11]。

キーゼヴェッターの批判にも拘らず、19 世紀後半を通じて「楽派」の語は音楽史記述に頻出する。キーゼヴェッターと同じ公募で次席となったフェティスは、地名に限らず、さまざまな音楽上の様式を示すためにこの語を用いたが [Fétis 1835–1844; [2]1860–65, Fétis 1876]、ドイツ語圏では、「楽派」を地名と結びつけることで、ドイツ音楽の覇権が叙述された。すなわち、北方のネーデルラント楽派によって育てられたイタリアの諸楽派、とりわけヴェネツィア楽派がドイツのバロック音楽に接続し、ヴィーン楽派の盛期古典派へと至る道筋である。（ブレンデルは上述の通り、ここに「新ドイツ派」を加えようとしたが、後続の音楽史書を参照する限り、その目論見は不首尾に終わった。）

これを体系的に示そうとしたのは、アドラー Guido Adler（1855–1941）である。その媒体として、国家事業としての楽譜叢書『オーストリアの音楽遺産 *Denkmäler der Tonkunst in Österreich*』[朝山 2008, 朝山 2013]と、同時代の専門家に執筆を呼びかけた『音楽史提要 *Handbuch der Musikgeschichte*』（1924; [2]1930）がある。彼はまた近代音楽史学の方法論の整備に取り組み、『音楽における様式 *Stil in der Musik*』（1911）および『音楽史の方法 *Methode der Musikgeschichte*』（1919）を著した。これらの書物では「楽派」を明確に定義していないが、この語の現れる文脈を整理すると、次のようなことが読み取れる。すなわち、ある限られた「土地 Ort」で培われた様式が音楽家の移動と交流によって流動性を得られた場合に「芸術上の楽派 Kunstschule」が生まれ、またこれは、音楽家個人の様式の特定が困難な古い時代の創作について、複数の作曲家の総合的な人格として機能する。しかし、地名を冠した「楽派」はどの作曲家がどの「楽派」に属するかを特定する働きを通じてナショナリスティックな含意を強めた。「楽派」概念には、一人の人間が複数の箇所に同時に存在できないという現実世界の制約が投影され

ているようにみえる。
　ただし、存命中の作曲家が創作上の理想や技法を共有して名乗る「楽派」はこの限りでないと思われる。今後の研究課題として、音楽史家が名づけたのではなく作曲家自らが名乗った「楽派」に地名が結合する例を考察する必要がある。それらは、芸術上の主張や批評、または社会的・政治的コンテクストを背景とする可能性がある。ブレンデルの「新ドイツ派」はその意味での先駆と言える。

（3）本研究では、ADMV の TV 第 1 回（1859）から第 38 回（1902）までの室内楽コンサートの全曲目をデータベース化した。1902 年を区切りとしたのは、会長がリストの弟子ブロンサルト Hans Bronsart von Schellendorff（1830–1913）からシュトラウス Richard Strauss（1864–1949）へ交代したタイミングであり、この頃までに設立以来の「新ドイツ派」周辺の人物の多くが死去や引退で協会を離れたためである。
　TV では通常、開幕と閉幕に管弦楽と合唱の参加する大規模なコンサート、オラトリオ、オペラ、教会音楽のほか、歌曲と室内楽を中心とするコンサートが 2 回開催された。598 件の演目を抽出したが、この中には、複数楽章から 1 楽章のみを 1 件としたり、同じ歌曲集から連続する複数曲を 1 件と数えたりする場合も含んでいるため、件数は概数である。
　件数としてもっとも多いのはリストとブラームスだが、器楽と声楽の割合は、前者が 1：2 に対し、後者は 2：1 である。次に多いのがコルネリウス Peter Cornelius（1824–1874）とラッセン Eduard Lassen（1830–1904）で、いずれも声楽作品に限られる。ほかに器楽曲が多数取り上げられたのはドレーゼケ Felix Draeseke（1835–1913）とベートーヴェンで、リストおよびブラームスの約 4 分の 1 ほどの件数にのぼる。全体を見渡すと、声楽、特に独唱歌曲が過半数を占める。また、正確なデータを取ることは難しいが、1 回の室内楽演奏会の中で、声楽と器楽の演奏時間を比較すると、声楽が上回る印象を受ける。
　こうした傾向からは、「新ドイツ派」による「前衛」音楽の演奏会の中でさえ、ブラームスの室内楽が重視されていたことが浮かび上がる。他方、TV で作品を発表した後、作品が広く知られる機会に恵まれない作曲家も多い。本研究は当初、そうした作品を現地文書館で収集する予定だったが、疫病など社会情勢の変化によって実施できなかった。
　研究期間内にデータの分析を終了できなかったため、今後もジャンル、作曲家、また TV の試演会としての機能に注目しつつ、研究を進める。とりわけ、TV におけるブラームスの位置づけを明確にし、従来は良好な関係を築けなかったとされるリスト、および「新ドイツ派」との関係を明らかにすることを目指す。

本報告書で言及した文献

一次資料

Vasari, Giorgio. 1550. [2]1568. *Le vite de' più eccellenti pittori, scultori, e architettori*. Firenze.

Martini, Giambattista. 1774. *Esemplare o sia saggio fondamentale pratico di contrappunto fugato*. 2 vols. Bologna.

Burney, Charles. 1776–1789. *A general history of music*. 4 vols. London.

Hawkins, Sir John. 1776. *A general history of the science and practice of music*. 5 vols. London.

Forkel, Johann Nikolaus. 1788–1801. *Allgemeine Geschichte der Musik*. 2 vols. Leipzig.

Schubart, Christian Friedrich Daniel. 1806. *Ideen zu einer Ästhetik der Tonkunst*. Wien.

Baini, Giuseppe. 1828. *Memorie storico-critiche della vita e delle opere di Palestrina*. Roma.

Kiesewetter, Raphael Georg. and François Joseph Fétis. 1829. *Verhandelingen over de Vraag: Welke verdiensten hebben zich de Nederlanders vooral in de 14, 15 en 16 eeuw in het vak der toonkunst verworven; en in hoe verre kunnen de Nederlandsche kunstenaars van dien tijd, die zich naar Italien begeven hebben, invloed gehad hebben op de muzijkscholen, die zich kort daarna in Italien hebben gevormd?*. Amsterdam.

Winterfeld, Carl August von. 1832. *Johannes Pierluigi von Palestrina: seine Werke und deren Bedeutung für die Geschichte der Tonkunst*. Breslau.

Kiesewetter, Raphael Georg. 1834; [2]1846. *Geschichte der europäisch-abendländischen oder unsrer heutigen Musik*. Leipzig.

Fétis, François Joseph. 1835–1844; [2]1860–65. *Biographie universelle des musiciens et bibliographie générale de la musique*. 5 vols. Brussels.

Brendel, Franz. 1852; [2]1855; [3]1860; [4]1867; [5]1875; [6]1878. *Geschichte der Musik in Italien, Deutschland und Frankreich: von den ersten christlichen Zeiten bis auf die Gegenwart*. Leipzig.

Fétis, François Joseph. 1876. *Histoire générale de la musique*. Tome cinquiéme. Paris.

Adler, Guido. 1911. *Der Stil in der Musik. I. Prinzipien und Arten des musikalischen Stils*. Leipzig.

Adler, Guido. 1919. *Methode der Musikgeschichte*. Leipzig.

Adler, Guido, ed. 1924; [2]1930. *Handbuch der Musikgeschichte*. 2 vols. Berlin.

二次資料

Determann, Robert. 1989. *Begriff und Ästhetik der "Neudeutschen Schule"*. Baden-Baden: Koerner. (*Sammlung musikwissenschaftlicher Abhandlungen*; 81)

Dömling, Wolfgang. 2008. "Zum Beispiel Neudeutsch — wieso eigentlich 'Schule'?" In *Liszt und Europa*, ed. by Detlef Altenburg and Harriet Oelers, Laaber: Laaber-Verlag, pp. 43–49. (*Weimarer Liszt-Studien*; 5)

Grout, Donald J. and Claud V. Palisca. 1996. *A western history of music*. 5th edition. New York: Norton. ［グラウト、パリスカ. 2001. 『新西洋音楽史』下、戸口幸策ほか訳、音楽之友社。］

Kleinertz, Rainer. 2006. "Zum Begriff 'Neudeutsche Schule'." In *Liszt und die Neudeutsche Schule*, ed. by Detlef Altenburg, Laaber: Laaber-Verlag, p. 23–32. (*Weimarer Liszt-Studien*; 3)

Neubauer, Jan and Thomas Radecke ed., 2021. *Die Musikfeste des Allgemeinen Deutschen Musikvereins von 1859 bis 1937 (Eine Dokumentation der Veranstaltungen)*, Hochschule für Musik Franz Liszt.

Pastres, Paolo. 2018. "Le scuole pittoriche nella letteratura artistica e nel collezionismo del Seicento, inizio Settecento." In *Il capitale culturale* supplementi 08: 533–59.

Roth, Dominik von and Ulrike Roesler, eds. 2020. *Die Neudeutsche Schule. Phänomen und Geschichte. Quellen und Kommentare zu einer zentralen musikästhetischen Kontroverse des 19. Jahrhunderts*. Berlin: Metzler and Kassel: Bärenreiter.

朝山奈津子. 2008. 「3 つの『デンクメーラー』に見るドイツ音楽史」、日本音楽学会『音楽学』53(2): 93–107.

朝山奈津子. 2013.『ドイツ音楽の遺産 Erbe deutscher Musik』が語る「ドイツ」音楽史：第二次大戦後の歴史観の変化を中心に」、日本音楽学会『音楽学』58(2): 69–82.

上山典子. 2008. 『「新ドイツ派」概念の成立：リストのヴァイマル時代（1848–1861）と「未来音楽」をめぐる論争』、東京藝術大学博士論文。

上山典子. 2013. 「文化現象としての『新ヴァイマル協会』（1854–67 年）：芸術家と芸術愛好家たちによる団体」、『沖縄県立芸術大学紀要』21:1–18.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 朝山奈津子	４．巻 127
２．論文標題 F．ブレンデルの「楽派」概念：音楽史と音楽批評の接点としての「新ドイツ派」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 弘前大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 91-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 朝山奈津子	４．巻 125
２．論文標題 G．アドラーの音楽史構想における「楽派」概念についての小考	５．発行年 2021年
３．雑誌名 弘前大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 69-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 朝山奈津子
２．発表標題 「楽派」概念の成立：美術史と18世紀の音楽通史および国民様式論との接合
３．学会等名 美学会第72回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 朝山奈津子
２．発表標題 新ドイツ「派」再考：音楽史記述における「楽派」概念の変容
３．学会等名 日本音楽学会第72回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Natsuko ASAYAMA
２．発表標題 A history of the concept of “ school ” in music historiography: From Art History via Burney to Adler
３．学会等名 The 21st Quinquennial Congress of the International Musicological Society in Athens (IMS2022)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Natsuko ASAYAMA
２．発表標題 Rethinking the New German “ School ” : The Changing Concept of “ School" in Music Historiography
３．学会等名 The sixth biennial conference of the Regional Association for East Asia of the International Musicological Society in Jeonjue (IMSEA 2022)（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関